岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(33)

大海廃寺緊急発掘調査報告書II

1979・3

岡山県教育委員会
文化課

序

現在岡山県下では，農業の近代化・合理化を図るため種々の施策が実施されていますが，その中でもほ場整備事業はもっとも大規模なものの一つです。県営・市町村営をはじめ団体営まで含めればその件数はかなりの数にのぼります。県北の山間部にもその波は及び，長い年月水田の下に眠っていた遺跡にも時代の足音が迫っています。

大海廃寺もそうした遺跡の一つとして，その保存を図るため，昭和52年度には国庫補助を受けて寺域の確認調査を実施し，関係機関と協議を重ねてまいりました。今回の調査は推定寺域外が対象でしたが，予想に反して南門等廃寺の南限施設が確認され，小規模のトレンチ調査による大規模な遺跡の範囲推定の困難さを痛感した次第です。しかし，前回の調査と併せて，大海廃寺の全貌がより明確になり，その保存の必要性がいっそう高まりました。幸い，南限施設は一部を除き保存されることになりました。これは，地元各位をはじめ，作東町農村整備課・作東町教育委員会の職員諸氏のご理解とご協力によるものであります。この機会にこのご理解とご苦労に対し深く敬意を払うものです。また，調査に参加された地元有志の方々と作東町文化財保護委員一同の皆様方にも厚く感謝します。

最後に，この小報告が，古代寺院址を考える上において，多少なりとも活用され，その保護保存に役立てていただければ幸甚に存じます。

昭和 54 年 3 月

岡山県教育委員会

教育長 佐藤章一

例　　言

1. これは，作東町山手地区ほ場整備事業に伴い，作東町文化財保護委員会が作東町から委託を受けて実施した，作東町山手に所在する大海廃寺の発掘調査の報告である。

2. 現地における調査実務は県教育委員会から派遣した文化課職員岡本寛久が前半担当し，後半からは岡本と同課職員伊藤　晃がその任に当たった。また，作東町文化財保護委員も参加した。期間は昭和53年10月11日から同年11月30日までである。

3. 遺構の実測にあたっては，塔心礎中心を原点として真北に主軸を設定した。昭和52年度調査と同様である。ポイント数値の単位は*m*である。

4. 高度値はすべて海抜高である。これはほ場整備事業用に仮設されたB.M.から引いたものである。

5. 図面の方位はすべて真北である。磁北はN 6°30′Wである。

6. 図面の縮尺は個々に明記しているが，個々の遺構の図は120分の1に統一している。

7. 第5図から第8図までの数字の単位は*cm*である。

8. この報告書の作成には伊藤，岡本が当たり，編集，執筆は岡本が担当した。

9. 出土した遺物ならびに実測図，写真等は岡山市西古松岡山県教育庁文化課分室に保管している。

10. 本書に掲載した遺跡位置図は，建設省国土地理院長の承認を得て，同院発行の50,000分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭54中複68号

本　文　目　次

序

例　　言

目　　次

第　1　章　調査の経過 …… 1

第1節　遺跡周辺の地理的・歴史的環境 …… 1

第2節　発掘調査に至る経過 …… 3

第3節　発掘調査の実施 …… 5

＜調査日誌＞ …… 6

第　2　章　調査の概要 …… 9

第1節　遺　構 …… 9

a　塀（ＳＡ01） …… 9

b　南門（ＳＢ05・ＳＢ06） …… 11

c　築地（ＳＡ02） …… 13

d　建物群（ＳＢ07～ＳＢ10） …… 13

e　その他の遺構（ＳＤ05～09，ＳＡ03・04） …… 15

第2節　遺　物 …… 17

軒丸瓦 …… 17

軒平瓦 …… 19

鴟　尾 …… 20

第　3　章　ま　と　め …… 23

挿　図　目　次

第 1 図　作東町の位置 …… 1
第 2 図　大海廃寺の位置（1：大海廃寺，2：長大寺址）（S＝1/50,000）…… 2
第 3 図　発掘調査予定対象地（網目部分）（S＝1/1,500）…… 3
第 4 図　発掘調査区遺構全体図（S＝1/200）…… 4
第 5 図　塀（SA01）実測図（S＝1/120）…… 8
第 6 図　南門（SB05・06）実測図（S＝1/120）…… 10
第 7 図　築地（SA02）実測図（S＝1/120）…… 12
第 8 図　建物群（SB07～10）実測図（S＝1/120）…… 14
第 9 図　溝断面土層図（S＝1/60）…… 16
第 10 図　出土遺物(1)　軒瓦（S＝1/4）…… 17
第 11 図　出土遺物(2)　丸瓦・軒平瓦（S＝1/6）…… 18
第 12 図　出土遺物(3)　鴟尾（S＝1/4）…… 20
第 13 図　出土遺物(4)　鴟尾（S＝1/4）…… 21
第 14 図　鴟尾復原想像図（S＝1/16）…… 22
第 15 図　大海廃寺伽藍復原想像図（S＝1/1,000）…… 24

図　版　目　次

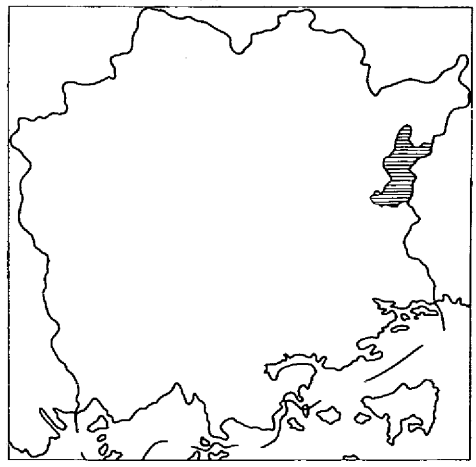
図版 1　南限施設
図版 2　塀
図版 3　南　門
図版 4　築　地
図版 5　築　地
図版 6　建物群
図版 7　調査区全景
図版 8　遺　物
図版 9　遺　物
図版 10　遺　物

第1章　調　査　の　経　過

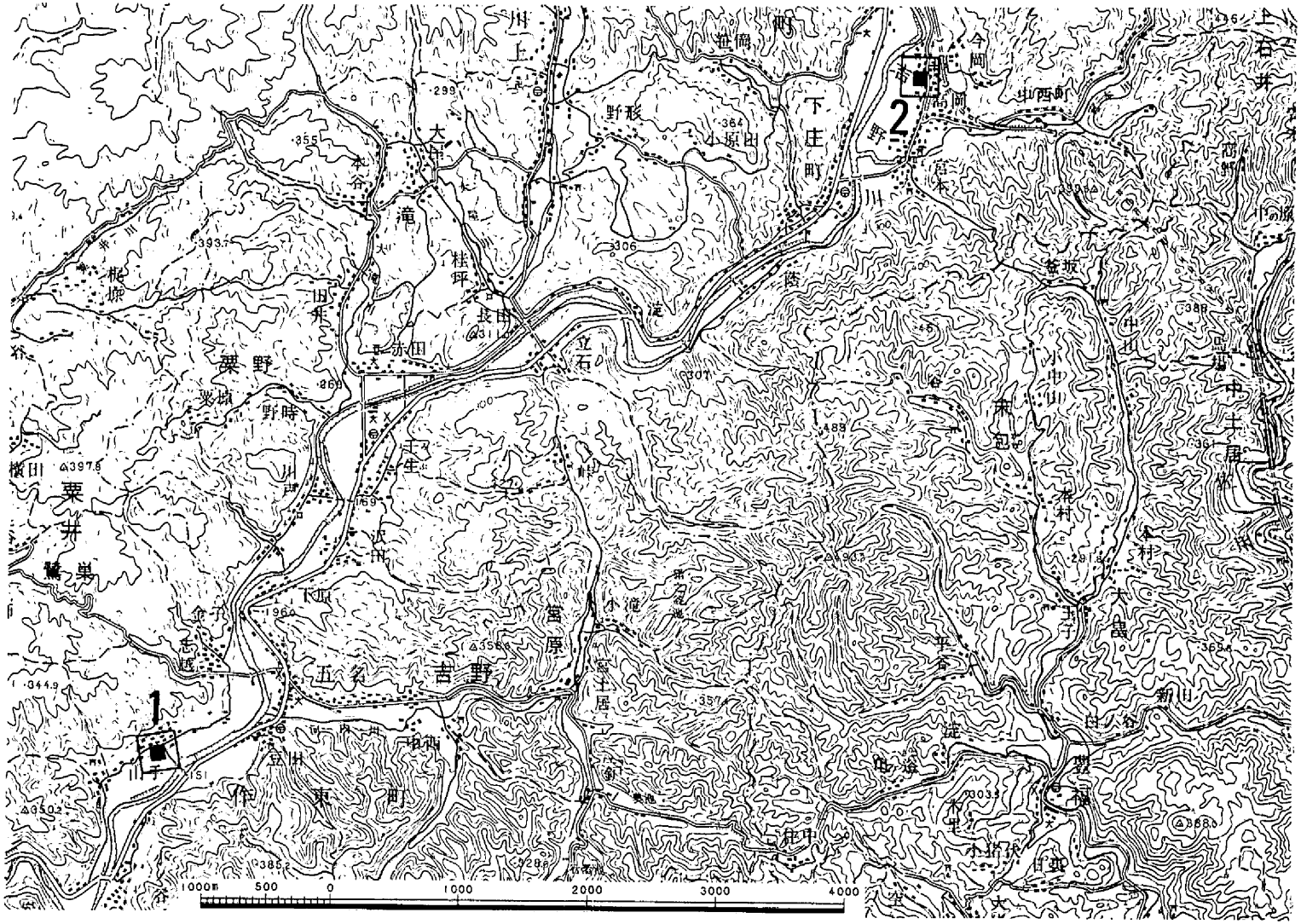
第1節　遺跡周辺の地理的・歴史的環境

大海廃寺は英田郡作東町山手に所在する。吉井川の一支流である吉野川の右岸に位置する。吉野川は英田郡西粟倉村大茅の岡山・兵庫・鳥取の三県境付近に源を発する。大原町・作東町を流下し，美作町林野で梶並川を合わせ，英田町を通り，月の輪古墳（註1）のある柵原町飯岡で吉井川本流と合流する。延長約50㎞の岡山県北山間の中河川である。吉野川流域では，河川の合流点付近を中心に狭長な谷底平野が形成され，そこを基盤として遺跡が分布する。古墳は大原町庄田に所在するものを北限とする。大海廃寺の所在する山手地区は北東から南西へ流れる吉野川の北岸河岸段丘上にあり，東西1㎞，南北0.2㎞の広さをもつ。東の対岸には，河内川沿いに五名の谷底平野が長さ1.5㎞，幅0.25㎞の規模で接している。また上流では，狭隘部を境として大原町壬生を中心に長さ2㎞，幅0.5㎞の平地が広がっている。この三つの平地が接近して一つの地域的なまとまりをもっている。この地域内に後期古墳が二十基前後所在するが，壬生の北方赤田では赤田古墳群が形成されている。隣接する平野部としては，上流に大原町古町・中町・下町・宮本と南北に続くものがあり，前期の山の後2号墳（註2）をはじめ二十基前後の古墳が形成され，また奈良前期の寺跡である長大寺址（註3）がある。下流には，山家川との合流点である作東町江見を中心にした長さ2.5㎞，幅0.75㎞の平野部があり，弥生中期以降の複合遺跡である高本遺跡（註4），奈良前期の江見廃寺（註3）が立地する。なお，奈良前期の寺跡としては，山家川上流沿いに，竹田廃寺，土居廃寺（註3）が近接して分布している。

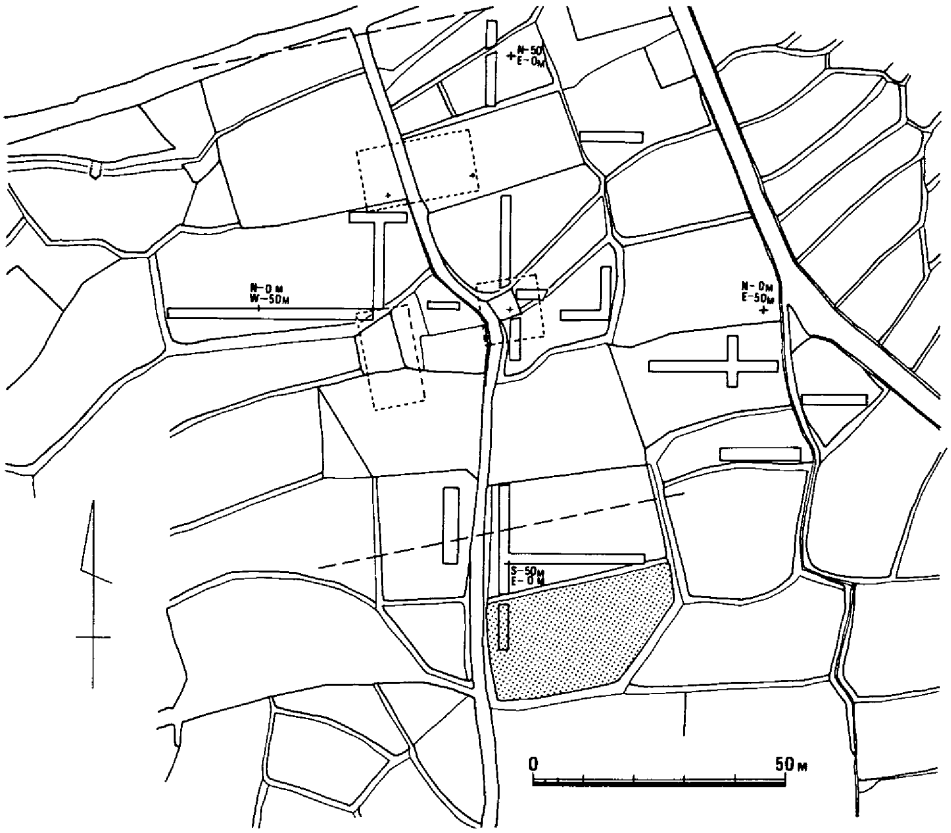
作東町はその名の示すとおり美作国の東端に位置する。隣国との交通路を考えてみると，現在の交通路がほとんどそのまま古代の道として復原されるようである。すなわち，江見から山家川を溯れば万能峠を越えて千種川上流域の佐用郡上月町に至るが，これは現在の国鉄姫新線の路線である。また中国縦貫自動車道は江見から東へ杉坂峠を越え，佐用川支流の幕山川沿いに佐用郡佐用町に至る。これらは美作国と播磨国を結ぶ通路で，とくに前者は古代に出雲街道といわれる幹線道路であった。一方，大海廃寺からは，作東町五名から東へ進み，佐用川支流江川川の上流佐用町豊福へ出る道路があり，大原町中町から佐用川上流域の佐用町上石井へ出，川を下って作用町中心部へ至る道路も播磨と継がる。これに対して吉野川を溯れば大



第1図　作東町の位置



第2図　大海廃寺の位置（1：大海廃寺，2：長大寺址）(S=1／50,000)



第3図　発掘調査予定対象地（網目部分）（S＝1／1,500）

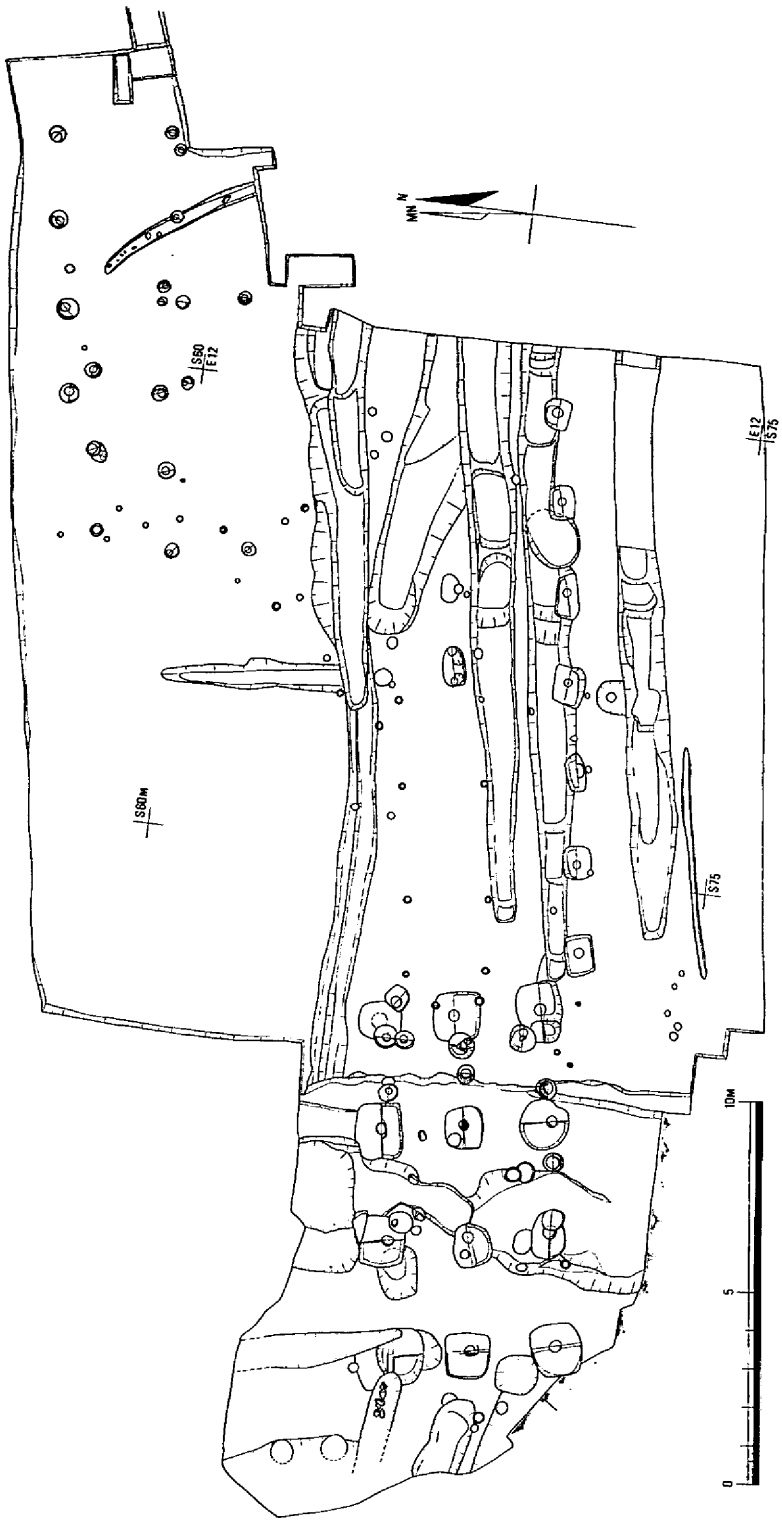
原町から西粟倉村へ入り，坂根から志戸坂峠を越えると八頭郡智頭町の千代川最上流域に下りる。千代川沿いに下れば用瀬町を経て，郡家町を通り，因幡国府へ通じる。このように，吉野川上流域は播磨から因幡に抜ける交通路である。現在も国鉄智頭線が佐用から大原を通り，智頭まで建設されつつある。

第2節　発掘調査に至る経過

大海廃寺周辺は現在大部分が階段状に水田化され，所々に宅地が散在している。その中に薬師堂と荒神社が小区画をもって祭られているが，薬師堂の前面に塔心礎があり，荒神社には礎石群がみられ，二棟の伽藍の存在が知られていた。しかし，現在の畦畔は度重なる水田造成の繰り返しでほとんど旧地形を失い，寺域を復元することは困難であった。この山手地区一帯においては場整備事業が計画されることになり廃寺の保存が大きな問題となった。岡山県教育委員会では地元関係者・町教育委員会との協議において，現在明確でない寺域を究明するための発掘調査を実施し，寺域内については設計変更によって掘削をさけて事業を行うこととした。寺域確認のための発掘調査は，岡山県教育委員会が主体となり，国庫補助を受けて，昭和52年11月10日から同53年2月28日まで実施し，四棟の主要伽藍を確認し，寺域についても推定線を描くことができた。これらの成果については，昭和53年3

月31日に『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（26）』として，報告書を刊行し，公表した。

ほ場整備事業は昭和53年度から，山手地区の西端から実施された。寺域周辺については53年の秋から着工する運びとなったが，推定寺域南限線のある水田の南に隣接する水田一面分については，昭和52年度の調査から廃寺に前後する時期の柱穴群の存在が想定されたため，その保存について，作東町農村整備課・作東町教育委員会・岡山県教育委員会三者の協議により，記録保存の処置を執ることとし，経費については，報告書刊行費は県教育委員会が負担し，その他については作東町が負担し，期間は延べ15日程度とすることで合



第4図　発掘調査区遺構全体図（S＝1／200）

意した。

第3節　発掘調査の実施

発掘調査は昭和53年10月11日より実施した。調査は作東町農村整備課から委託を受けた作東町文化財保護委員会が主体となって執行し，現場での調査の担当は県教育委員会から派遣した文化課職員がその任にあたった。調査対象地は約700m^2であったが，昭和52年度の調査で対象地内に設定されていた南第6トレンチでは，水田再造成前の水田間の溝が検出されたのみで他に遺構はなく，また東端は本来，谷の下がりになっていたと推定していたため，発掘必要面積はそれよりもかなり縮小されるものと考えていた。耕土をブルドーザーで除去した後，発掘調査に入った。当初発掘必要部分を明確にするため各所に小トレンチを設け，再造成前の水田の状況を把握することに努めた。その結果旧水田は南北方向に三段あり，東は，上段は25m，中・下段は20mで大きく落ちることがわかった。調査必要面積は400m^2に縮小され，上段西半では遺構がまったくみられないことから，中・下段の遺構の存在もあまり期待されず，調査は予定どおり進行するかに思われた。

ところが，10月19日に至って事態は大きく変化した。中段の西端で切合関係にある数基の柱穴の集合が検出され，その中の一基は一辺1.2mの方形の掘形をもつことから，大型建物の存在が確実視されることとなった。翌日には同様の柱穴群がさらに二つ検出され，東西方向に伸びる溝も二本見つかり，それらがいずれも廃寺の方位をとっていたことから寺の施設の可能性が強く，位置からして南門と築地ではないかとみられ，昨年推定した南限線は誤りで，今回の調査対象地が寺域内に入ることが確定的になってきた。調査の進行にしたがって，さらに溝や大型柱穴列が検出され，廃寺南限施設であることは確実となった。築地は二時期のものが重複しているとみられ，また南門は調査対象地外の西方にある農道と畑地部分に伸びていることから，新たにこの部分も調査対象地に含めねばならなくなり，限られた期間と予算から，中・下段部分には10月25日，農道・畑地部分には11月5日，ユンボ・ブルドーザーを再導入し，地山の10cm上面まで排土作業を行った。南門は二間，三間の掘立柱建物であることが判明し，十二基の柱穴がすべて完存し，削平は受けているものの，残存状況は良好であった。

南門の検出が終了した段階で，その保存が大きな問題となってきた。南門とそれに取付く築地が全面的に発掘されたのは県下で最初のことであり，大海廃寺ではすでに金堂と塔の基壇が確認され，講堂についてもその残存が確実視され，さらに従来南門と推定していたものが中門である可能性もでてきたため，主要伽藍すべてが何らかの形で残存しているという，きわめて貴重な遺跡であることが判明した。一方，ほ場整備事業は，昭和53年分については調査地区を残してほぼ終了しており，推定寺域内の設計変更に続く再度の変更はきわめて困難な状況にあった。種々の検討を行ったが，昭和52年度の調査前の設計で施工すれば，南門の東端柱穴列上部と築地寄柱列，溝の上部の一部は削平されるが，農道以西と溝の下部は保存されることになり，遺跡の概況は大きく損われずにすむとみられ，現状においてはこれが最善の方法と判断せざるをえなかった。調査は溝についてはＳＤ04を除き全掘し，

塀（ＳＡ01）柱穴と南門柱穴については半割に停め，調査終了後保存部分については埋め戻しを行い，今回の発掘調査を終了した。

当初予想しなかった大規模な遺構が検出されたため調査期間が大幅に延び，地権者上山　一氏には多大のご迷惑をおかけしたことを深くお詫びします。また経費についても当初の予算を上回ったため県費を追加したが，埋め戻しについては作東町に負担を願った。農村整備課課長補佐　小坂田　弘氏にはひとかたならぬお骨折りを頂いた。深謝します。調査全般にわたっては作東町教育委員会社会教育係長　有元実範氏に種々のお世話をいただいた。厚く感謝します。調査は主に県教育委員会文化課職員が担当したが，作東町文化財保護委員の方々にも参加を願った。ご高齢にもかかわらず参加下さった委員の方々に敬意を表します。特に地元の江見　豊委員には色々ご苦労をおかけした。木枯しの中，発掘作業に参加された下記の方々のご支援，ご協力に対しても深く謝意を表するしだいです。

調査参加者氏名

作東町文化財保護委員会　　道信研爾　高田三爾　春名義雄　安東千秋　江見　豊　守安昭雄　主原弘栄　有瀬光覚

地元作業員　　上山近代　岡本一馬　岡本貞女　岡本志ま江　加百良夫　西川寛一　西川こよし　西川信子　西川正子　山本政枝

＜調　査　日　誌＞

昭和53年10月11日　発掘調査開始。午前中重機による耕土除去作業。作業員重機の後から耕土除去作業。

10月12日　耕土除去作業。昨年確認した旧水田境の溝を確認する。

10月13日　耕土除去作業。水田再造成（まちだおし）がなされているので，造成前の水田の状況を把握するため，調査地区内に小トレンチを七本設定し掘り下げる。南北方向で，かつて三段になっていたらしい。

10月16日　旧上段水田部分遺構検出作業。柱穴数基確認。新たに小トレンチ四本掘り下げ。下段水田の東端部検出。それより東は上段水田面より80㎝以上深く，調査の要なし。

10月17日　上段清掃，遺構検出作業。柱穴列二列検出（ＳＢ07・ＳＢ08）。上段水田の東端を検出するため小トレンチ二本掘り下げ。上段東端の下がり検出。調査必要範囲がほぼ決まる。中段残土除去作業開始。

10月18日　中段造成土除去作業。

10月19日　中段西半造成土除去作業。遺構検出作業。北西隅で複雑な切合関係にある大型柱穴群検出。１ｍ南でも大型柱穴群検出中。大規模な建物が考えられ，南門の可能性もある。

10月20日　中段西半遺構検出作業。第２・第３の柱穴群確認。溝二本確認（ＳＤ02・SD03）。柱穴群と溝の位置関係から南門の可能性がきわめて強い。溝に切られた方形掘形柱穴列検出。方位は柱穴群と等しい（ＳＡ01）。

10月23日　中段東半造成土除去作業。下段遺構検出作業。

10月24日　中段東半遺構検出作業。上段と中段の境から溝を検出（ＳＤ01）。ＳＤ02・ＳＤ03を一部掘り下げる。

10月25日　下段・中段東半重機による造成土除去作業。その後遺構検出作業。新たに溝二本検出（ＳＤ04・ＳＤ07）。

10月26日　中段・下段遺構検出作業。溝を一本確認（ＳＤ05）。溝３断面写真撮影。

10月30日　上段東半柱穴群検出作業。柱穴掘り下げ。柱穴列新たに確認（ＳＢ09）。

10月31日　上段東半柱穴群検出作業。清掃。溝を検出（ＳＤ06）。建物一棟確認（ＳＢ10）。

11月１日　上段東半柱穴群検出作業。柱穴群写真撮影。中段・下段東半遺構検出作業。ＳＤ03に切られた方形柱穴列が東へ続くことを確認。ＳＤ02・ＳＤ04と一体で塀を構築していると判断される。ＳＤ03の掘り下げ。

11月２日　ＳＤ01・ＳＤ03の掘り下げ。

11月３日　ＳＤ01・ＳＤ03・ＳＤ04の掘り下げ。

11月５日　調査区西方の農道と畑の表土を重機で除去する。大型柱穴をいくらか検出。大型建物であることは確実である。

11月６日　農道・畑部分遺構検出作業。

11月７日　農道・畑部分遺構検出作業。二間・三間の南門を確認する（ＳＢ05）。

11月８日　農道・畑部分遺構掘り下げ。調査区中央南北セクション東壁実測。ＳＤ04・ＳＤ05掘り下げ。上段柱穴群半割掘り下げ。

11月９日　ＳＤ02・ＳＤ05掘り下げ。調査区中央セクション除去。南門柱穴列清掃。

11月10日　実測用ポイント設置作業。南門検出状況写真撮影。ＳＤ02・ＳＤ04掘り下げ。

11月11日　ＳＤ02・ＳＤ04掘り下げ。ＳＤ01～04溝中セクション土層写真撮影。

11月14日　排水作業。南門東端柱穴列柱痕確認のため一段掘り下げる。ＳＤ02掘り下げ。南門柱穴群スケッチ。

11月15日　上段東端柱穴群実測，半割掘り下げ。ＳＤ02掘り下げ。ＳＤ03溝中セクション除去。ＳＤ02～04溝中セクション土層図実測。南門柱穴一段掘り下げ柱痕検出作業。実測用ポイント設置作業。

11月16日　上段東端柱穴群実測。SD 01・SD 05実測。ＳＤ01・03～05溝中セクション土層写真撮影・実測。同セクション除去。築地柱穴列検出・掘り下げ。南門柱穴一段掘り下げ柱痕検出作業，清掃。

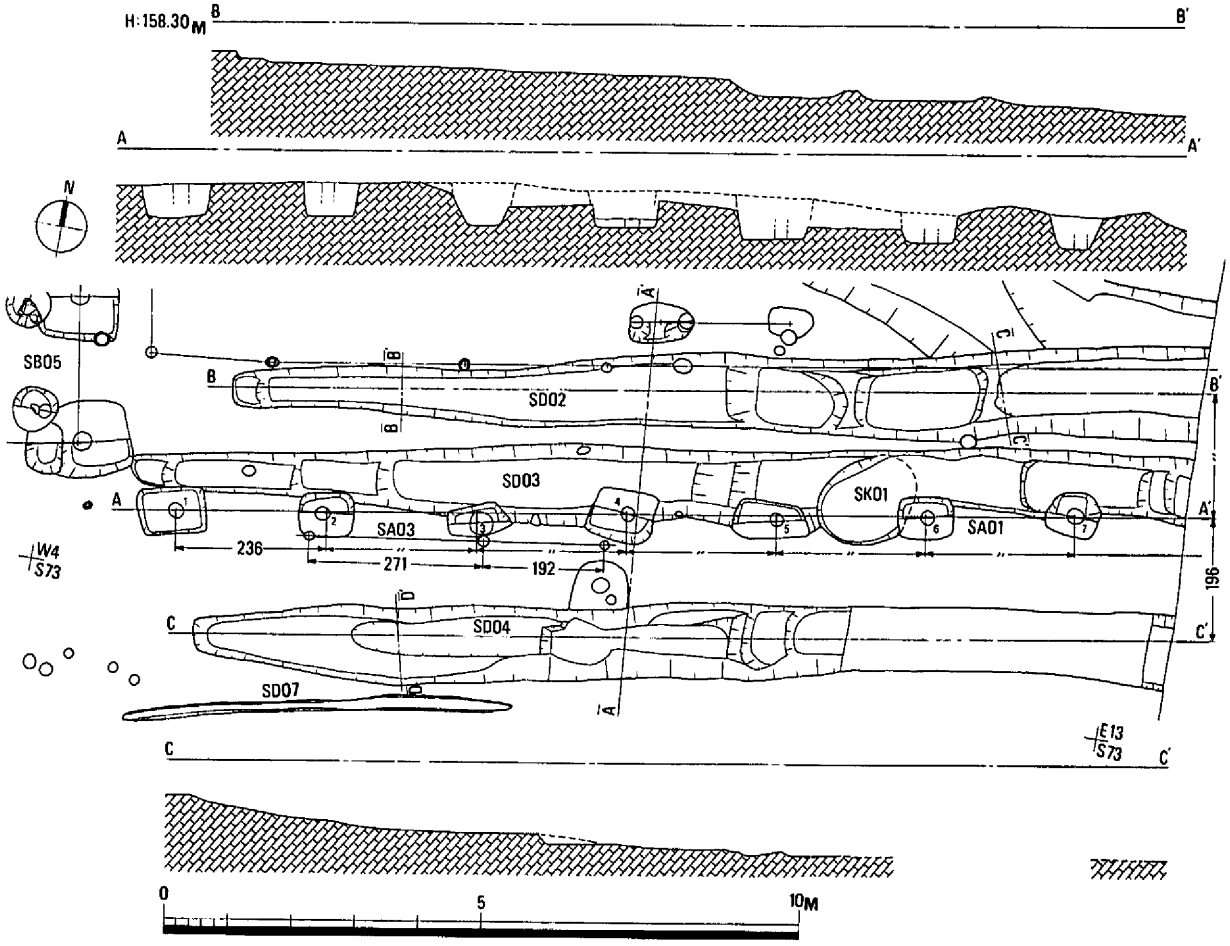
11月17日　排水作業。ＳＤ02～04・南門柱穴群実測。

11月19日　築地柱穴列検出，掘り下げ。南門全景写真撮影。調査区全域清掃作業。

11月20日　全景・個々の遺構写真撮影。南門柱穴断割。

11月21日　南門柱穴断割。南門柱穴実測。

11月22日　南門柱穴断面実測，写真撮影。



第5図　塀（ＳＡ01）実測図（Ｓ＝１／120）

11月24日　現地にて保存協議。

11月26日　南門部分埋め戻し。

11月27日　南門部分埋め戻し終了。築地部分埋め戻し。

11月30日　築地部分埋め戻し終了。調査完了。

註

(1) 近藤義郎他『月の輪古墳』月の輪古墳刊行会　1960年

(2) 栗野克己・福田正継「(5)山の後2号墳発掘調査報告」『岡山県埋蔵文化財報告8』　1978年

(3) 伊藤　晃『楢原廃寺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(13)　1976年

(4) 山磨康平・井上弘・岡田博・高畑知功「高本遺跡(1)」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査5』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告(8)　1975年

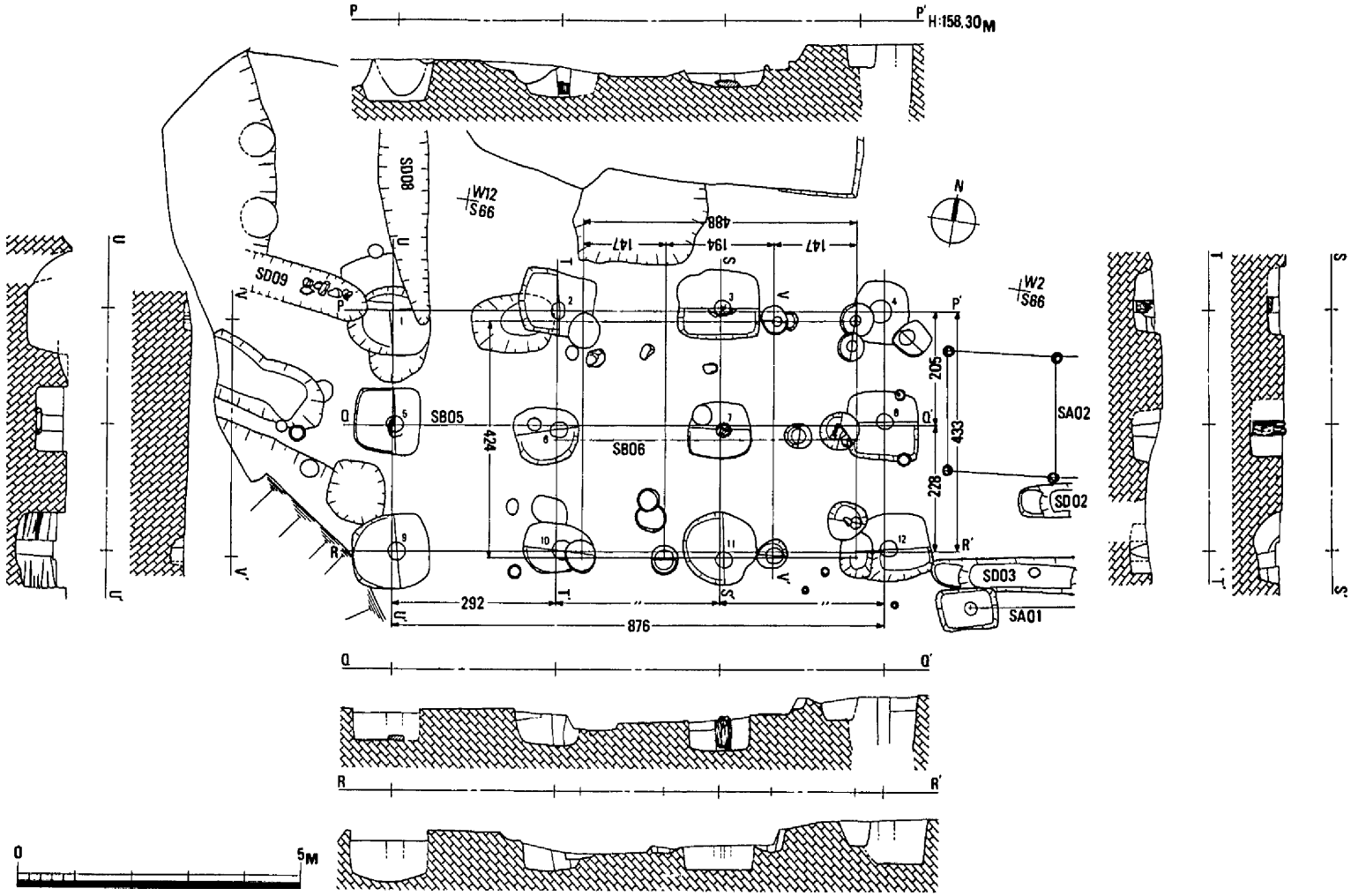
第2章　調査の概要

第1節　遺構（第4図）

今回の発掘調査で検出した遺構は主に大海廃寺の南限施設にあたり，南門，築地，塀である。他にこれに前後する溝や土壙があり，調査区の北東部分では柱穴群が検出され，四棟の建物が考えられる。

a　塀（SA01）（図版2，第5図）調査区南端を東西に走る柱穴列である。溝SD03によって北側を一部切られている。六間分検出したが，さらに東へ続く。柱間は等間隔で236㎝を測る。柱穴は長方形の掘形で，長辺80～100㎝，短辺70～80㎝の規模であるが，それぞれの柱穴の辺はかならずしもそろわず多少南北に振っている。いずれも柱痕跡が明瞭に認められ径20～25㎝である。この柱穴列で注意すべき特徴として，それぞれの柱穴の底部の高さが一様でなく，西から二基ずつが対になり，段々に低くなっていくことがある。柱がそれにつれて長くなっていくことは考えられない。おそらくは，東の谷部へ傾斜していく地形に即したものであろう。二基ずつが対になっていることから，あるいは塀の屋根は階段状になっていたかもしれない。一段目と二段目の高さは約10㎝，二段目と三段目では約20㎝，三段目と四段目では約10㎝の高度差がある。なお，柱穴中には瓦が含まれており，2の柱穴では鴟尾の破片を含む瓦が礎石代わりに使用されていた。

SA01を挟むような形で，その南と北に溝SD04とSD02がSA01から約196㎝の等距離で掘削されている。溝の幅は共に100～120㎝である。底は東へ向かって傾斜しているが，途中で段をもって急に深くなるという階段状を呈しており，これはSA01の柱穴が二基ずつ対で階段状に低くなっていくこととよく対応している。溝の断面は第9図にみるように壁の傾斜が急で，底は平坦になって，ほぼ等脚台形の転倒した形をなすが，SD04については部分的に底の半分がより深くなっている。SD02は底に黒褐色粘土の薄層が堆積し，瓦等の遺物を含むが，その上は暗灰褐色粘土と黄色粘土がブロッ



第6図　南門（SB05・06）実測図（S=1／120）

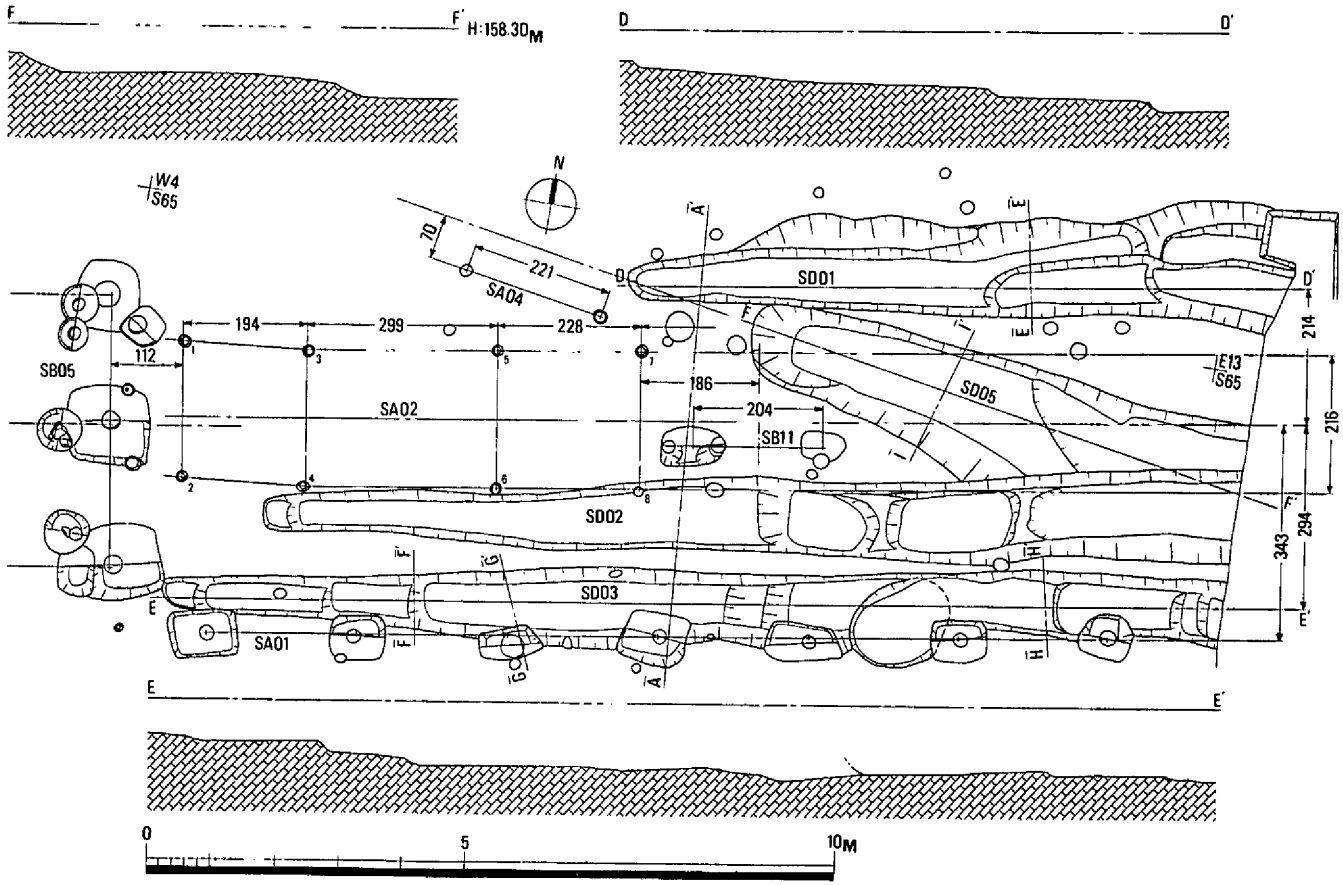
ク状に混合して厚く堆積し，遺物はほとんどみられなかった。ＳＤ04は遺物をかなり含んだ黒褐色粘土が厚く堆積し，その下には黄褐色粘質土が堆積している。東へいくほど黄褐色粘土層は厚くなっている。ＳＤ02・ＳＤ04の深さは最大で90㎝である。この二本の溝はその位置関係や形状からＳＡ01に伴う施設と考えられる。塀を築いてその前後に深い溝を掘り寺の南限施設としたものであろう。$\overline{A}\overline{A'}$断面ではＳＤ02・ＳＡ01柱穴・ＳＤ04の順で深くなり，底の高さはＳＤ02とＳＤ04で50㎝違う。ＳＡ01の方位はＥ 9. 5°Ｎである。

b　南門（ＳＢ05・ＳＢ06）（図版３，第６図）　調査区西端・農道下，さらに西方の畑地部分から，多数の柱穴が検出された。かなり切合関係がみられ，また規模も大小さまざまであり，数棟の建物が重複していると考えられ，長期に渡って建替がなされたのであろう。二棟分については柱穴がほぼ揃い，その規模が復原されるが，それ以外については削平を受けていることもあり，完全な形で捉えることはできなかった。

ＳＢ05　梁行二間，桁行三間の掘立柱建物である。桁行柱間は三間とも等間隔で292㎝を測る。梁行柱間は等間隔でなく，北205㎝，南228㎝である。柱穴掘形はほとんど方形を呈するが，11のように円形に近いものもある。掘形の規模は一辺120㎝前後であるが，６・７は一辺100㎝，３・９は一辺140㎝とかなり差があり，全体としては画一性に欠ける。深さにもかなり差があり，一番深いものと，一番浅いものとでは48㎝の違いがある。２と７の柱穴には径30㎝の柱痕が残存していた。根がらみはみられなかった。他の柱穴の柱痕跡もほぼ30㎝で一致している。３と５の柱穴では礎石がみられたが，他の柱穴にはみられず，この二つの柱穴がいずれも浅いことから，柱材の長短に関係したものかと思われる。柱穴には瓦が若干含まれていた。ＳＢ05は大海廃寺初期の南門であるが，塀には対応せず，中軸線がほぼ一致することと北端柱列と南端柱列の延長がそれぞれＳＤ01・ＳＤ03を通ることから次に述べる築地と対応するものである。

ＳＢ06　ＳＢ05と同様，梁行二間，桁行三間の掘立柱建物と考えられるが，規模は東西方向にかなり縮小している。桁行柱間は中央が広く194㎝あり，東と西は147㎝を測る。梁行については中央の柱列が検出されなかったが，おそらく二間と推定される。梁行全長は424㎝あるため，梁行柱間は二間ならば212㎝となる。柱穴掘形は円形で50～60㎝の径があり，柱痕跡は径20～30㎝である。ＳＢ05の柱穴を切っていることから，ＳＢ05に後続するもので，建替えられた南門と考えられる。ＳＢ05・ＳＢ06とも建物の棟方向はＥ 9. 5°Ｎである。確認された建物はＳＢ05とＳＢ06の二棟であるが，他にも柱穴がかなりみられる。特にＳＢ05の８，12を切っている柱穴は径が70㎝もあるしっかりしたものであり，南門の柱穴としてもおかしくないものである。その深さから考えれば，この二つに対応する柱穴はすでに削平されている可能性が強く，あるいは梁行一間，桁行三間の建物を想定することもできるかと考える。そうした場合梁行柱間は170㎝となる。

南門でもう一つの問題となるのは塀に対応すべき建物の有無である。塀の中軸線はＳＢ05の南端柱列よりさらに南を通る。検出された柱穴のうちこの建物に該当するかとみられるものは，ＳＢ05の９と５の間にある一辺100㎝の方形のピットである。ＳＤ02の延長線もこのピットを通ることから位置的には北東隅の柱穴とすることも可能であるが，このピットは他の柱穴とは異なりすり鉢状の底部を



第7図　築地（ＳＡ０２）実測図（Ｓ＝１／１２０）

呈するため，掘立柱建物よりは礎石建物の可能性がある。それにしては根石が残存しておらず，塀に対応する南門の柱穴とは断定しかねる。ＳＢ05の１に切られた大型柱穴の存在も問題である。

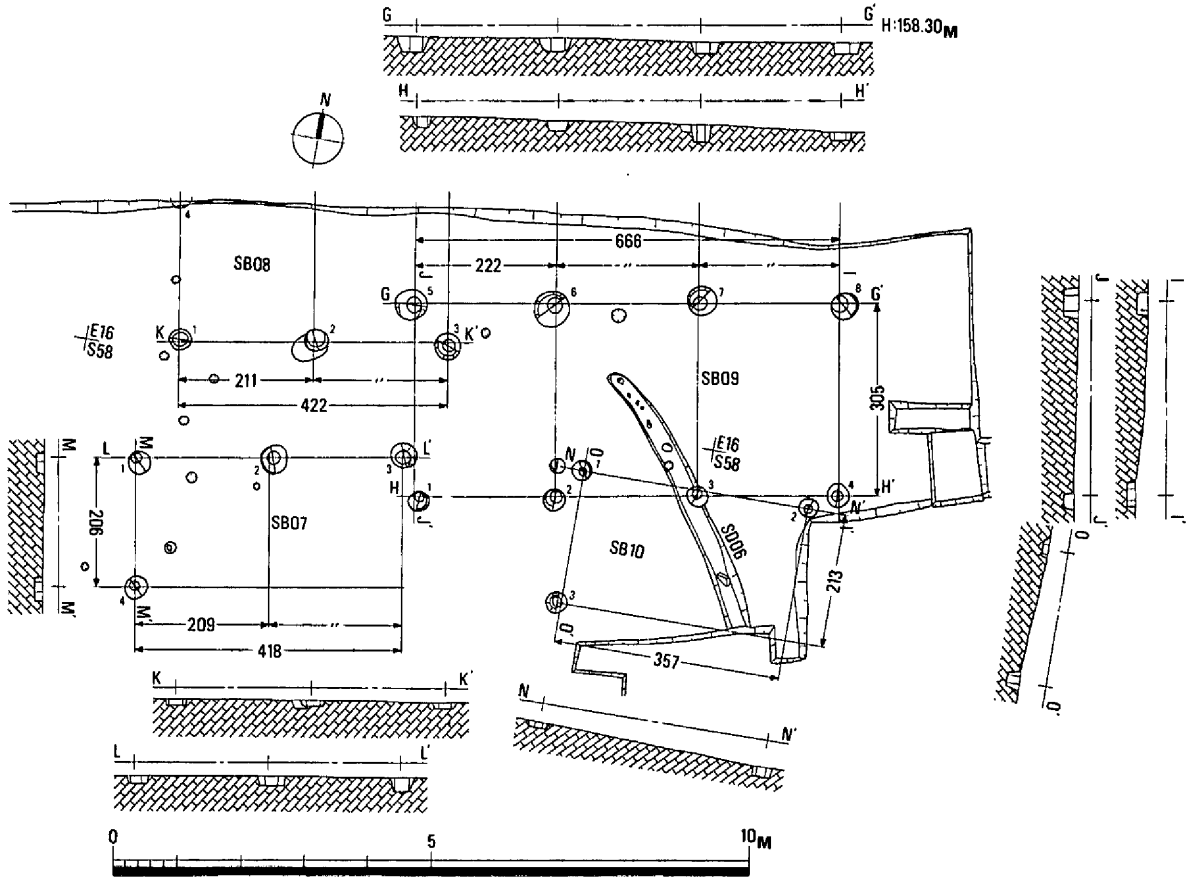
c　築地（ＳＡ02）（図版４・５，第７図）　ＳＤ02とＳＤ01の間で，南北二基ずつが対になった柱穴が検出された。築地の寄柱列と考えられる。三間分が検出されたが，東へさらに続いているものと推定される。南北の柱間は216㎝を測るが，東西は一定しない。南門へ取付く西端の一間分は北へ軽く屈折する。個々の柱穴は小さく径20㎝程度で，深さ20㎝内外の残存である。南の柱穴はＳＤ02の埋土上で検出された。柱穴中からは土師器片・瓦片が出土した。削平されて，築地の高まりはまったく認められなかった。東へ三間分いったところで，東西方向で対をなす長径100㎝と70㎝の楕円形のピットが検出され，西の方を半割して掘り下げると両端に二つの柱痕が認められた。寄柱列との位置関係から，日常の通用に使用した脇門のような施設ではないかとも考える（ＳＢ11）が，柱穴以外それを裏付けるものはない。

塀と同様に，この築地にも南と北に溝が平行して掘られる。ＳＤ01とＳＤ03がそれである。築地からの距離は同一ではなく，ＳＤ03との距離が長く，80㎝程異なる。南側の犬走りの幅は約120㎝である。塀の溝と比較して大きく違う点は二つの溝の始まりが揃わないことである。ＳＤ01は南門端から四間目で始まるのに対しＳＤ03は南門南東隅の柱穴をかすかに切っている。その差は720㎝もある。ＳＤ03は幅130㎝，深さは70㎝で，溝内の堆積土は大きく上下二層に分けられる。上層は暗灰褐色土と黄褐色粘土がブロック状に混合したものであるが，下層は黒褐色粘質土で瓦等の遺物を含んでいる。東へ行くほど下層が厚くなる。ＳＤ01は幅が150㎝～180㎝と広いが，溝内は二段構造になり，90㎝程の幅でさらに一段深く落ちる。断面を観察すると一度掘り直していることがわかり，深い部分は最初の溝で，幅の広い浅い部分は掘り直し後のものである。溝内の堆積土はこの掘り直しの前後で大きく二層に分かれる。下層は上部に黒褐色土，下部に黄色粘土がありどちらも瓦等遺物を含む。特に上部に多い。また上部には礫や炭も含まれる。上層は炭や焼土が含まれ，遺物も大量に包含されている。溝の底部は塀の溝と同様に階段状に深くなるが，ＳＤ01をみるとより整備されている感じを受ける。$\overline{A}\,\overline{A'}$断面ではＳＤ03はＳＤ01より45㎝深い。ＳＤ01とＳＤ03はＳＡ02と組み合わされて寺の南限施設を形成している。ＳＡ02とＳＤ02，ＳＤ03とＳＡ01の切合関係から，築地が塀に後続することは確実である。前述したように，検出された南門ＳＢ05に取付くのはこの築地である。

d　建物群（ＳＢ07～ＳＢ10）（図版６，第８図）　調査区の北東域で柱穴群が検出され，四棟分の建物が確認された。いずれも東西棟建物であるがＳＢ10はやや方向を異にする。

ＳＢ07　梁行一間，桁行二間の掘立柱建物と考えられる。柱間は梁行206㎝，桁行209㎝である。柱穴は径40㎝の円形掘形で，柱痕跡は15～20㎝を測る。15～20㎝の深さがあるが，２と３に対応するものは検出されなかった。１～４の残存状況からすれば検出されるはずであるが，本来存在しなかった可能性もある。そうすれば柵ないしは塀の遺構とも考えられるが，４の存在から一応建物としておく。

ＳＢ08　二間の柱列が柱間211㎝で検出され，１に対応する柱穴４が調査区北辺で柱間226㎝程で一部検出され，梁行一間，桁行二間の掘立柱建物ではないかと推定されるが，２に対応する位置を坪



第8図　建物群（SB07～10）実測図（S＝1／120）

掘りしたが柱穴は検出されなかった。柱穴の在り方がＳＢ07と同様なのか，あるいは南北棟建物の可能性もある。柱穴は掘形円形で径40㎝，柱痕跡は20～25㎝である。

ＳＢ09 桁行三間以上の東西棟掘立柱建物と考えられる。桁行柱間は222㎝である。１～４と５～８の二つの柱列が柱間305㎝で対応しているが，規模がかなり異なることから，この部分は廂ではないかとみられる。１～４の柱穴は径35㎝程度の円形掘形で柱痕跡は径15㎝である。５～８の柱穴はそれより大きく，掘形は径40～60㎝の円形で，柱痕跡は25㎝を測る。北は調査区域外，東は削平を受けており，全体の規模は明確でない。

ＳＢ10 梁行一間，桁行一間以上の東西棟掘立柱建物とみられるが，桁行柱間が357㎝と常識以上に長すぎるため，築地等の施設の可能性もあり，また１と２の間にもう一つ柱穴が存在した可能性もある。２と対応する柱穴が検出されなかったので，ＳＢ07と同様の柱穴の在り方を示しているようにもとれる。梁行柱間は213㎝である。

ＳＢ07・ＳＢ08・ＳＢ09の棟方向は平行し，E10°Nであるが，ＳＢ10は方向を異にし，Ｅ0.5°Nである。ＳＢ07・ＳＢ08とＳＢ09は切合っているので，三時期以上の建物の変遷が考えられる。方向からすればＳＢ07・ＳＢ08・ＳＢ09は近接したものとみられるが，ＳＢ10はやや時期差があるかもしれない。なお，柱穴からは多少の遺物の出土があり，瓦の破片も含まれていた。ＳＢ09の２の柱穴には玉縁の丸瓦の大きな破片が入っており，礎石代わりに使用したようにみられる。

e　その他の遺構（ＳＤ05～09，ＳＡ03・04）　ａ～ｄの遺構の他に寺に前後する時期の遺構がみられる。

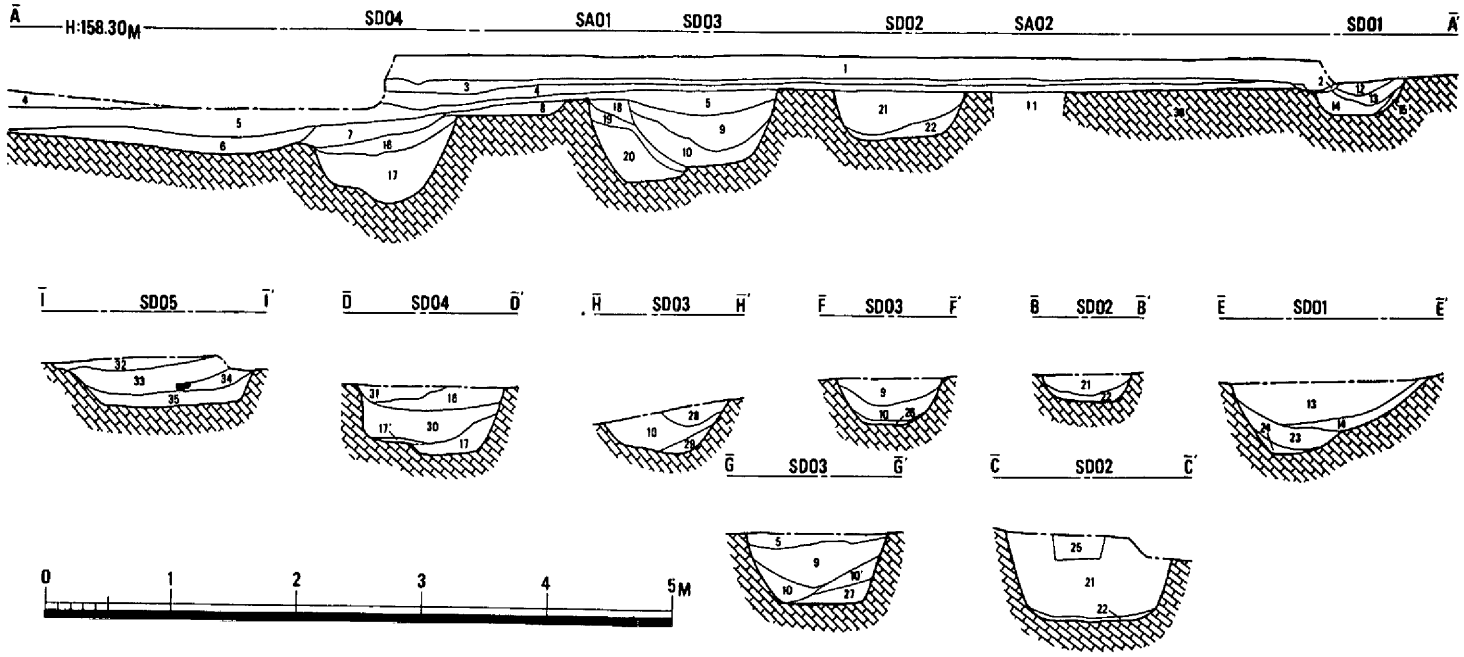
ＳＤ05 ＳＤ02に切られて，方向を寺と異にしているため，寺に先立つ遺構である。東南東へ広がりつつ傾斜していく。検出最大幅で200㎝，深さは66㎝を測る。溝内堆積土は大きく上下二層に分かれる。上層は黒褐色土，下層は黄褐色粘土である。両層とも瓦を包含しているが，遺物は下層に多い。溝底は広く，若干階段状を呈する。

ＳＡ04 わずか一間の柱列にすぎないが，ＳＤ05との位置関係から取上げておく。柱間は221㎝で柱穴は径20㎝である。その方向はＳＤ05の中軸線の方位と平行し，Ｅ9.5°Ｓである。

ＳＤ07 ＳＤ04の南にあり，幅15～20㎝の浅い溝である。走行の方位は寺の方位よりは若干北へ振る。瓦等を包含していた。どのような性格のものかは不明である。

ＳＡ03 二間の柱列である。柱間は同一でなく192㎝・271㎝である。ＳＡ01の柱穴を切っている。柱穴は径15㎝と小さく，その方位はＥ8.5°Nである。寺に伴う施設であるかどうか不明である。

ＳＤ08・ＳＤ09　その走行方位から寺の後の遺構である可能性が強いが，ＳＤ08からは軒丸瓦第１類の半完形品が出土している。幅70～80㎝である。ともに瓦片を包含するが，ＳＤ09には礫がかなり混入していた。その性格は不明である。



1. 造成土（黄褐色粘土）
2. 青灰色微砂
3. 暗灰褐色粘土
4. 暗灰色粘質微砂
5. 暗灰褐色土（礫・遺物多）
6. 暗灰褐色土（礫含まず）
7. 黒褐色土
8. 暗灰褐色土（黄色粘土含）
9. 灰褐色粘土混黄褐色粘土
10. 黄色粘土小粒混黒褐色粘質土
11. 黒褐色粘土粒混黄褐色粘土
12. 暗灰褐色粘質土
13. 暗褐色粘質土
14. 黒褐色粘質土
15. 黄褐色粘土
16. 暗灰褐色土混黄色粘質土
17. 黄色粘土
18. 灰褐色粘土
19. 黄色粘土粒混暗灰褐色粘土
20. 黄色粘土
21. 黄色粘土
22. 黒褐色粘質土
23. 黒褐色土
24. 黄色粘土
25. 黄褐色粘土混暗灰褐色土
26. 暗灰褐色土
27. 暗灰色粘土混黄色粘土
28. 暗褐色土
29. 暗灰褐色土混黄褐色粘土
30. 黄褐色粘土混黒褐色粘土
31. 暗灰褐色粘土混黄褐色粗砂
32. 黒褐色土
33. 暗褐色土
34. 黒褐色土
35. 黒褐色粘土混黄褐色粘土
36. 黄色粘土（地山）

13・14・5・9・32・33・34
上　層
23・24・10・10′・27・35
下　層

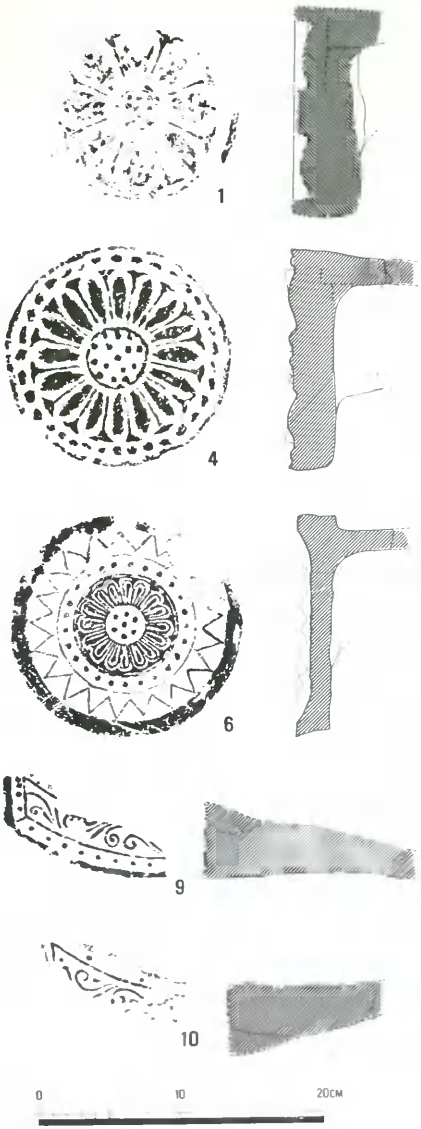
第9図　溝断面土層図（S＝1／60）

第2節　遺　物

（図版8～10，
第10～13図）

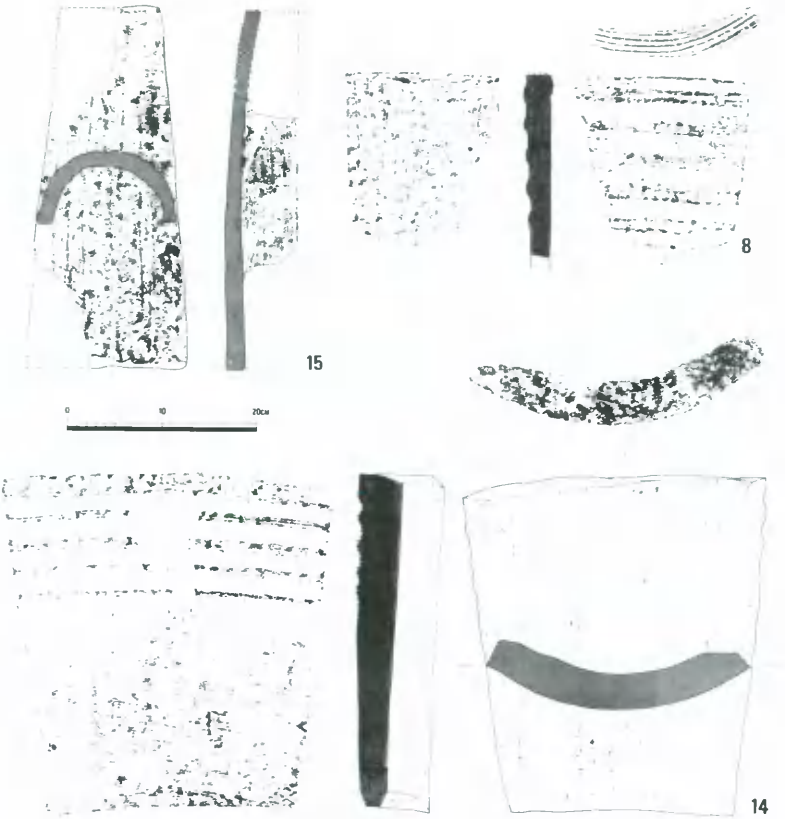
今回の調査で出土した遺物は瓦を主とし，他に土師器・須恵器・石器等整理箱40箱にのぼる。現在整理中であり，その内容はいまだ明らかでない。ここでは軒丸瓦・軒平瓦・鴟尾について概略的なことを述べるに止める。

軒丸瓦　前回の調査の報告書で(註1)，調査で出土したもの，過去に表採されたものを集成分類し，1類～7類を設定した。このうち今回出土したものは1類・3類・4類であり，第5類については鴟尾の胴部につく蓮華文であることが判明した。1類（1・2）は前回2片出土したにすぎなかったが，今回は完形に近いものも含め5点出土した。素弁八弁蓮華文である。中房は径30㎜，高さ8㎜とかなり突出している。蓮子は1＋8であるが，隣する蓮子はわずかに食い違う。花弁は中央が高く厚いが，明瞭な稜線をもたない。間弁は平坦に近く，中房にまで達する。外縁は幅9㎜，高さ11㎜と細く高い。上面は平坦になり突帯状の圏線が一重する。胎土には砂粒を多く含む。前回出土したものは焼成良好で青灰色を呈するが，今回出土したものはいずれも焼成がやや甘く，灰色～茶褐色を呈する。赤色顔料を塗布されたもの（1）がみられる。第3類（3・4・5）は5点出土し，うち3点は瓦当面がほぼ完存してい



第10図　出土遺物(1)軒瓦（S＝1／4）

る，細弁十六弁蓮華文である。中房は径43㎜，高さ4㎜で，低平なものである。蓮子は1＋4＋10で突出している。花弁は細く高いものであるが，幅は一様でなく均整に欠ける。間弁は高く，鋭角的に突出する。外区には楕円形の連珠文を34個めぐらせるか，これもまた不均整である。外縁は断面三角形で尖り，内傾面をもつ。胎土には砂粒を多量に含む。焼成はいずれも良好であり，青黒色を呈する。全体に造りが粗く，瓦当面にヒビ割れが目立つ。1点（5）は全体に火を受けて黒く変色し，剝落が目立つ。瓦当面の径に大・小の二種がある。大は170㎜，小は155㎜を測る。大のものが焼けている。第4類（6）は3点出土したが，図版に示したものは前回の調査で出土したものである。複弁八弁蓮



第11図　出土遺物(2)丸瓦・軒平瓦（S＝1／6）

華文である。内区，外区共に扁平で線刻的な感じを受ける。中房は凹み，1＋6のすこし突出した蓮子をもつ。蓮華文は間弁が完備し，正確な複弁である。しかし，平面に押捺したような，まったく盛り上がりのない花弁である。蓮華文の外周に凹線がめぐり，その外に連珠文帯がめぐる。連珠は25である。外区は匙状に内湾する斜面に線鋸歯文をめぐらせる。外縁は平坦面になる。第4類は瓦当部と丸瓦部の接合部分に段をもつ特異なものである。

軒平瓦　今回の調査では10数点の出土をみた。完形品が2点ある。先の報告書では第1類から第3類に大別したが，厚さ・文様等種々の特徴を検討すれば，更に細別すべきだと考える。前回出土したものも再度収録し，分類を行いたい。第1類（7，14）は端面48㎜の非常に厚い瓦である。端面は素文で篦削りがなされているだけである。先の報告書の第2類の一部（2－2）にあたる。背面は狭い顎をもち，幅15㎜前後の突帯が4～5本付加される。下弦幅320㎜，全長360㎜を測る。上面側端部は篦削りで面取りされ，広い水平面をもつ。砂粒を大量に含む。焼成は甘く黄褐色を呈するが前回出土したものには青灰色のものがある。今回の調査ではもっとも多く出土し，完形品が二点ある。格子叩目が認められる。第2類（8）は先の報告書で第1類とされていたものの一部（1－1，1－2）を含む。顎をもたないが，第1類同様，背面に幅18㎜前後の突帯を付加している。第1類よりははるかに薄く，形も小さくなっている。端面の厚さは26㎜で少し乱れた篦描きの重弧文を飾る。上面側端部は第1類同様水平に面取りされるが幅はきわめて狭く，新たに，端面上端も面取りされる。背面は格子叩目を篦で消している。胎土には砂粒が多く含まれる。焼成は良好で青灰色を呈し，堅緻である。ヒビ割れが目立つ。第3類は先の報告書の第1類と第2類の一部（1－3，1－4，2－1）を含む。第1類と同様背面にはごく狭い顎を持ち，突帯を5条程度付加しているが，第1・2類と相違して，突帯と背面との境が不明瞭でなだらかな波状となっている。端面上端は面取りするが，上面側端は面取りしない。端面は素文のものと篦描き重弧文があり，二種に分けられる。厚さは素文のものがすこし厚いが，そう大きく違わず，第2類と同程度である。第4類（9）は均正唐草文を飾る。無顎で，上面側端を面取りする。かなり厚く，端面は肥厚し，幅50㎜程度である。背面は篦で調整されるが，粗雑で，篦の移動痕が凹凸となって残る。唐草文は整美なもので，規則的に繰り返す。内区の端では中央の葉が内区外縁に取りつく。外区は連珠文をめぐらせ，背面側の隅を線で区切る。胎土は砂粒を多量に含み，焼成良好で青灰色を呈する。今回の調査で出土した。第5類（10）も均整唐草文で飾る。唐草文はややくずれた感じを受けるが，なお規則性をもつ。内区上端隅に珠点をもつ。外区は連珠文を粗に施す。粗雑なつくりで，胎土には石粒・砂粒を大量に含む。焼成は良好堅緻である。今回出土したものである。第6類（11）はやはり均整唐草文であるが，文様はかなりくずれて規則性を失い，端部では一葉が反転するのみである。内区の幅も狭い。外区には粗い連珠文を施す。背面はナデて調整しており，これは第5類と同様である。前回出土したもの（3－3）である。第7類（12，13）も前回出土したものである（3－1，3－2）。均整唐草文であるが，唐草はまったく優美さを失い，三本の単純な線となる。中心飾は相対するハート状の蕨手の中心に三角文を置くようである。唐草文は片側二単位か四単位で反転する。内区上端隅に珠点を置く，外区には連珠文を粗に施す。端面は大きく肥厚し，幅55㎜を測る。胎土は精良で，大きな砂粒・石粒を含まない。背面の調整には篦削りを

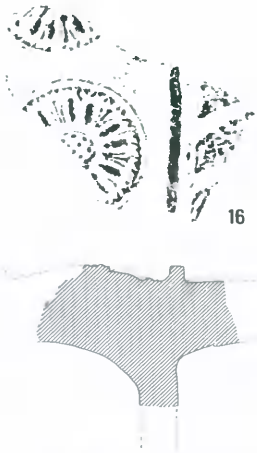
行なう。

鴟尾　前回の調査では多数の鴟尾の破片が出土したが，今回もまた10点に近い出土があった。鰭部は前回のものと同形態であるが，今回は蓮華文を飾った胴部破片が出土し，注目された。蓮華文は複弁六弁で，外区に面違鋸歯文を施す。中房は突出し，蓮子は１＋４＋８ではないかと推定される。蓮華文は胴部から盛り上がり，高さ12㎜を測る。蓮華文のある胴部と鰭部の境には細く高い突帯を置く。火を受けており，淡茶褐色を呈する。前回出土した第６類とした軒丸瓦は，築地瓦ではなく，この鴟尾胴部の蓮華文であり，下半の切り込みは，鴟尾の胴部にあけられる，降り棟の堤瓦の上に置く丸瓦の末端を挿し込むための弧形透し穴とみられる。鴟尾の破片の中には胴部の破片と思われるものが他に数片あり，なかには平行篦描沈線を持つものがあるが，装飾文様を推定することはできなかった。なお，出土した破片を復原図にあてはめてみれば第14図のようになるであろう。

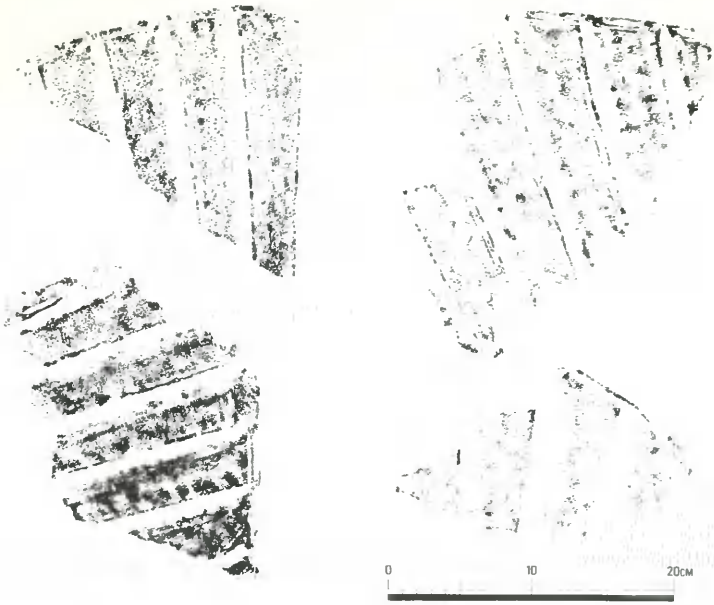
完形に近い行基式丸瓦が出土している（15）ので少し触れておく。全長380㎜，先端弦幅復原で180㎜を測る。上面は20㎜の幅の篦で縦方向に調整されている。内面の布目は10㎜で14本の糸が組まれている。胎土には石粒・砂粒を多量に含む。焼成は良好で青灰色を呈し堅緻である。

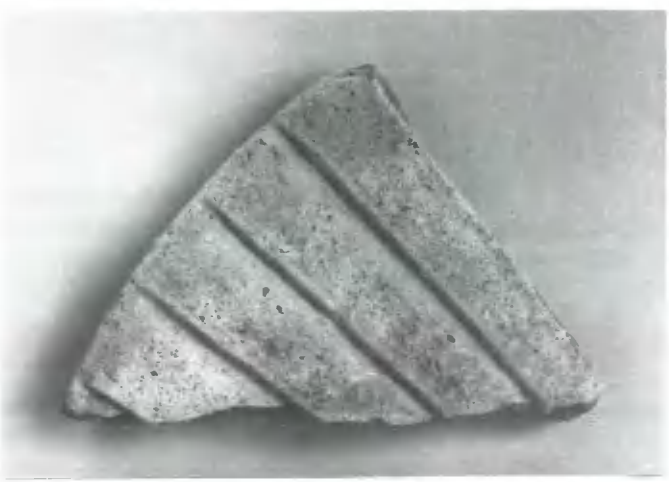
なお，遺構からの各型式の出土状況は次のとおりである。ＳＤ01では下層から軒平２類が出土した。紹介した行基式丸瓦も伴出している。ＳＤ02からは，上層から軒平１類，下層から軒丸３類，ＳＤ03では，溝底から軒平１類完形２点他１点，軒丸３類１点，鴟尾が溝底と下層からそれぞれ１点，ＳＤ04からは，鴟尾胴部破片他１片，軒丸３類大型が黒褐色土中から出土，ＳＤ05の上面からは軒丸１類が，ＳＤ08からも軒丸１類が出土している。

以上で概略を終わるが，最後に年代比定を行い，他については整理を継続して他日を期したい。年



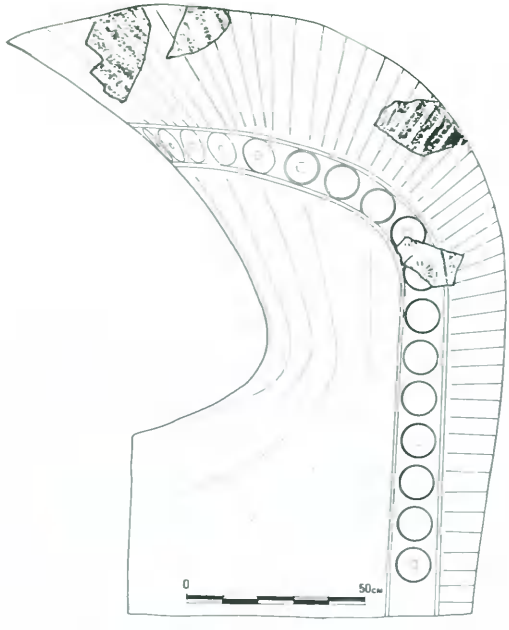
第12図　出土遺物(3)鴟尾（Ｓ＝１／４）





第13図　出土遺物(4)鷸尾（S＝1／4，拓本のみ）

代は先の報告書に述べたとおりであるが，軒丸1類は白鳳前半期に属すると考える。径は小さいが，全体に厚いつくりであり，外縁部も高く，飛鳥時代までは溯らないであろう。軒平1類は型式的には最も古いものとみられ，胎土，焼成が鴟尾と類似し，白鳳前半期の可能性が強い。ただ軒丸1類とは胎土を異にするようであり，片方が小作りなのに軒平1類は最大の瓦であり，この二つが組み合うかどうかはにわかに判断仕難い。軒平2類の方が軒丸1類と胎土が類似し，小作りであり，共に赤色顔料が塗付されており，軒丸1類と軒平2類が組み合う可能性の方が強い。そうすると軒平1類はその胎土の類似と大型品ということから，軒丸3類の大型品と組み合うことも考慮される。軒丸2類の存在もあるが，この径は復原で155㎜と軒丸3類の大型よりは小さい。軒平1類と同2類の突帯は同一のものであり，時期的には大きな差がないようにみられる。このようなことから組み合わせについては，軒丸1類と軒平2類，軒丸3類大型と軒平1類というように仮定したい。この二つの組み合わせの瓦は白鳳前半期から中頃のものと考えたいが，軒丸3類の連珠文は後出的要素とみられるため，これについては白鳳後半に降すべきかとも思われ，あまり確信がもてない。鴟尾は，蓮華文の胴部破片が大阪府四天王寺と同型のものであり（註2），蓮華文の型式から白鳳期前半のものと考えたい。これらに後続するとみられる軒丸2類，軒丸3類小型，軒平3類については白鳳期後半と考えられる。軒丸3類と軒平3類がおそらく組み合うとみられるが，軒丸2類は調査中には出土せず，その存在も若干疑問視され，組み合いについては不明である。軒平4類の均整唐草文は平城宮 6664 型式によく類似する。ただ外区下端隅の区画線に相違が認められる。 6664 型式は奈良前半期に主流なものであり（註3），軒平4類は奈良前半と考えられる。軒平5類もややくずれた感はあるものの，まだ均整がとれており，軒平4類と近接した時期を考えたい。



第14図　鴟尾復原想像図（S＝1／16）

軒平６・７類は文様がかなりくずれており，４・５類よりは後出するとみられ，奈良後半期の年代を与えたい。軒丸４類は平城宮6282・6284と文様構成が類似する。6282は奈良中期，6284は奈良初頭に比定されている（註３）。文様がきわめて扁平なことを後出的要素とみれば奈良後半期に比定すべきかと考える。なお，奈良時代の瓦の組み合わせについては資料が少ないため，現状で答えることは困難である。奈良前半期の軒丸瓦の出土がないことをどのように捉えるかも問題であろう。

註

(1) 正岡睦夫・岡本寛久『大海廃寺緊急発掘調査報告書』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（２６）　1978年

(2) 文化財保護委員会『四天王寺』埋蔵文化財発掘調査報告　第６　1967年

(3) 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅶ』奈良国立文化財研究所学報第26冊　1976年

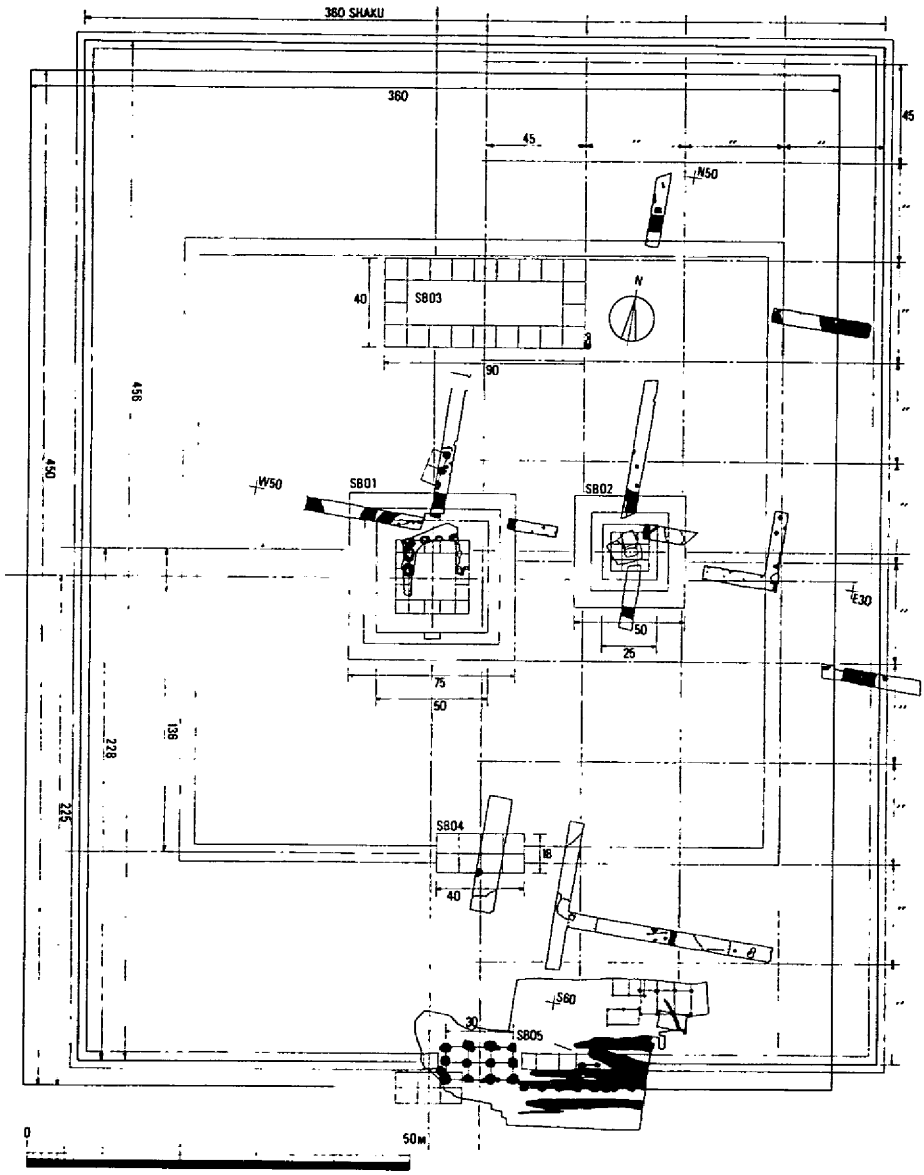
第３章　まとめ

ほ場整備の実施に先立って行われた今回の発掘調査は，当初予想を裏切り，大海廃寺の南限施設を検出するという，思いもかけなかった結果になり，各方面に様々な混乱をひき起こした。今振り返えれば，寺域の推定にあたって，地方寺院，それも山間部のものという偏見がなかったとは言いきれないように思われる。あくまでも事実にのっとり，確実な裏付けを追求する姿勢を忘れないようにしたいと反省している。しかし，今回の調査で得られた成果は，大海廃寺の実体を解明する上で，きわめて大きな意義をもつことは否定できない。特に南門の検出によって寺域の南限と中軸線が判明したことは，今後伽藍配置や寺域の推定を行う上で，大きな目安ができたことになり，より正確な推定が可能となろう。ここでは，このような調査結果を踏まえ，大海廃寺の復原を試行してみたい。かなり強引でこじつけめいたこともあろうかと思われるが，あくまでも試案として観ていただきたい。

この時代の大規模な建築を考える際に欠くことのできないものとして建物の設計段階で使用された基準尺の問題がある。この基準尺にしたがって計画設計することにより企画性をもった建築が行われる。平城宮はその典型であり，いわゆる天平尺を基準とした企画設計がなされている。建物の共存関係を考えるうえにおいても基準尺の共有を根拠にする例がしばしばみられる。基準尺をもっとも的確に表わしているものは柱間である。そこで，大海廃寺の基準尺を検討してみると，ＳＡ01は１尺が295㎜，ＳＡ02は292㎜，ＳＢ05は291㎜，ＳＢ01（金堂）は290㎜となる。ＳＡ01とＳＡ02は時期が異なるため，この差を時期差と捉えれば，１尺が295㎜であった時期と291㎜であった時期が考えられ，この二つが大海廃寺の基準尺とみられる。しかし，誤差がかなりあるようで291㎜の場合，１尺は280㎜から299㎜の幅がある。このことは木取りの粗雑さにも関係するようで，南門柱穴の礎石の存在などはそのことを示しているように思われる。

大海廃寺の伽藍配置を考える上で一番問題となったのは塔と金堂の中軸線が一致しないことと，両者がきわめて接近していることがあった。南門が検出されたのでその中軸線を北へ延長すると金堂基

壇の東端をかすめることが判った。このような事実から，金堂と塔は同時に企画設計されたものではなく，その建築時期にずれがあるものと考えられる。それぞれの建物の北へ入れたトレンチで瓦溜りが検出されているので，そこから出土した軒瓦をみると，金堂は6点あり，軒平2類1点と同3類2点，軒丸4類3点があるのに対し，塔は4点すべてが軒丸4類である。点数が少ないため断定は避けたいが，先の年代比定からすれば金堂が古い様相を示している。大海廃寺の南限施設にはＳＡ01とＳＡ02との二時期のものがある。ＳＡ01については対応する門がなく，ＳＡ01の柱穴の残存状況からす



第15図　大海廃寺伽藍復原想像図（Ｓ＝1／1,000）

れば，門が基壇建物でない限り，発掘区より西方に位置すると考えられ，その際には寺の中軸線は西へずれる。もしそうであれば，中軸線は金堂の中心に近くなる。先の瓦溜りの状況とこの中軸線のずれの可能性を考え合わせれば金堂が塔より先に建てられた可能性が強い。伽藍配置の上で塔の占める位置は当初中心であったのが白鳳後半期には従続的，装飾的なものとして中心からはずされるようになり，金堂と並置されるか，金堂が代わって寺院の中心位を占めるようになるという一般的傾向も考慮されねばならない。このように，大海廃寺は当初金堂のみが中心に建築されたと仮定したい。そうすると，従来南北棟と考えていた金堂は東西棟でなければならない。礎石のあり様から従来よりも身舎を一間西へ伸ばし，東西五間の建物とし，柱間は東から 6・7・7・7・6 尺と復原したい。金堂西トレンチで検出された溝はその形状・走行や瓦溜りのないことから，雨落溝ではないと考えたい。問題は南北の梁行である。常識的には四間であり，現地形が基壇部を残している以上その可能性が高いが，第15図では五間に表現している。これは五間とすれば，その中軸からＳＡ01までの距離が約 225尺となり（ 295㎜で），ＳＡ02と塔心礎との距離から推定される寺域南北長の 450尺に等しくなり，金堂の東西方向の中心線と塔のそれとの距離がＳＡ01とＳＡ02の距離に等しくなるという語呂合わせ的発想によるものであり，頭書の反省からすれば図示すべきではなかったかもしれない。南北五間とすれば雨落溝外縁で75尺，基壇50尺と復原されるが，南北四間ならはそれぞれ70尺，45尺程度と復原される。金堂とＳＡ01が対応するかどうかであるが，金堂の中心を寺の中軸とすれば，ＳＢ05は金堂に対応しないため別の門があることになり，それに伴う南限施設としてはＳＡ01しか検出されていない。金堂とＳＡ01は基準尺が相違することが最大の問題であるが，ここでは一応金堂（ＳＢ01）とＳＡ01を対応させて考えておく。寺域範囲は295㎜を使用し，金堂建物については礎石の実測から291㎜としている。寺域は東西 360尺，南北450 尺と考える。

次に塔（ＳＢ02）であるが，塔はＳＡ02と対応するとみられる。ＳＡ02から塔心礎までは 228 尺（ 291㎜で）を測り，天平尺の 225尺に相当する。雨落溝の外縁で50尺，基壇25尺，建物 5・7・5 尺とした。四天柱間の狭いのが普通であるが，心礎の大きさからすれば四天柱間は 7 尺とみられ，基壇との関係から 5・7・5 とした。

中門は従来南門としていた柱穴列が規模，方位からしてふさわしく思われる。ＳＡ02からの距離も 93.5尺と適当である。ただ南門中軸線が柱穴上を通るため，中門とすれば偶数間の中門になってしまう。偶数間の中門は法隆寺中門ぐらいしか知られておらず，きわめて異例なことになる。また掘形が円形であることも気にかかる。強引に中門にすれば，東西四間40尺，南北二間18尺となるか。

講堂は，かつて民家の庭先で確認された掘立柱を講堂のものとすれば，中軸線からほぼ45尺の位置にあるので中軸を対称軸にすれば，九間90尺となる。梁行は四間40尺程度で，中門と塔心礎との距離に近くなる。もう一間北へ伸ばせば，その一間に回廊が取り付くことになる。

南門は東西三間30尺，南北二間15尺を測る。

寺域は南北450尺，東西 360尺と考えたい。東へ180尺いくと，前回の調査で検出した谷部に当たる。自然的なものかどうか明瞭でないが，寺の東限として利用されたかもしれない。築地の有無は明確でない。北へ 450尺いくと現在集落を貫通している，寺地よりかなり高い道路付近に達する。360

尺，450尺は共に90尺の倍数である。今寺域内に45尺方眼を組むと，内郭の南北がほぼ納まる。そこで東西は45尺の6倍・270尺と仮定すれば，図のようになる。以上が伽藍配置の復原であるが，整数にこだわりすぎたきらいがないでもない。もう少し資料の増加があるまで控えるべきであったかもしれない。

大海廃寺は一度全面的な改築がなされ，寺域そのものが若干移動した可能性がある。これは従来金堂を中心としていた伽藍から，塔・講堂を整備し，七堂伽藍の偉容を整えたものと解することができるかもしれない。ＳＤ02の断面土層をみれば，一時に埋められたものと解せられる。寺域の移動は，南限地域では従来あった溝を埋め，その間に新しく溝を掘るということで捉えられる。この大改築の原因が何であったかは定かでないが，その時期はある程度推定可能かと考える。出土した軒瓦類のうち，もっとも多量に出土したものは軒丸3類と軒丸4類である。つまりこのどちらかである。ＳＤ02・ＳＤ04に埋まっていた瓦は軒丸3類である。そうとすれば，軒丸4類の時期，すなわち奈良後半期，逆上って中頃ということになる。この時期の瓦が平城宮式瓦と類似することの意味が問われなければならない（註1）。美作国では平城宮式瓦は官衙・官寺にのみ使用されたと考えられてきた（註2）が，久米町久米廃寺から平城宮6663型式系統の軒平瓦の存在が新たに知られ（註3），大海廃寺の6664型式とともに，私寺においても平城宮式瓦が使用されたことが明白となった。国分寺さらには国府の造営という国家的施策における地方豪族層の参画を充分に考慮しなければならない。

しかし，中央政府と美作地方豪族層との密接な関係はそれ以前から存在していたとみられる。大海廃寺出土の鴟尾が大阪四天王寺出土のものと同型であることは注目されてよい（註4）。また，美作国内の廃寺の多くが和銅6年（713）以前に建立され，川原寺式系統の瓦を使用していることも重要な事実である。大海廃寺はこのような美作地方において現在知りうる資料からは最古の寺とみられる。

大海廃寺について，今まで触れてこなかったが重要なことに，ＳＤ05の検出がある。ＳＤ05はしっかりした溝であるが，その方位が前回の調査で金堂北トレンチで検出した柱穴列とほぼ直角になる。寺院に先立つ大型建物の存在が考えられる。前回の南3トレンチ・塔西トレンチ等で方形掘形の柱穴が検出されている。ＳＤ05から金堂北の柱穴列までの距離は60mを測る。この間にさらに建物が存在し，大規模な建物群の存在も可能性がある。ＳＤ05から瓦が出土することは重大である。ＳＤ05上面からは軒丸1類が出土している。今後の課題であろう。

なお，調査区の北東域で検出された建物群については1尺が303mm基準尺をもつようであり，寺に関係するとしても新しいものであろう。

大海廃寺は出土瓦からすれば，奈良末あるいは平安初期に火災で消失したものと考えられる。

註

(1) 森　郁夫「平城宮系軒瓦と国分寺造営」『古代研究』3　1974年

(2) 伊藤　晃『楢原廃寺跡緊急発掘調査概報』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（13）1976年

(3) 栗野克己「久米廃寺（19）（補遺編）」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査（補遺編）』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（24）1978年

(4) 四天王寺と同型の鴟尾残欠は他に姫路市打越大谷瓦窯跡，京都市大宅廃寺跡から出土している。

南 限 施 設

1. 全 景（西から）

2. 全 景（東から）

図版 2

塀

1. 全景（東から）

2. 柱穴断面　3(上)　7(下)（北から）

3. 溝断面　SD02（左上），SD03（左下），SD04（右上・右下）（東から）

南　　門

1. 全　景（北から）

2. 柱穴　2（左上），5（左下），7（右上），3（右下）

図版 4

築　　地

1.　全　景（東から）

2.　全　景（西から）

3.　溝SD03全景（東から）

築　　地

1. 溝SD01全景（東から）

2. 溝SD05全景（東から）

3. 溝　SD01細部（左上），SD01断面（左下）（右上），SD05断面（右下）

図版 6

建　物　群

1. 全　景（北から）

2. 全　景（東から）

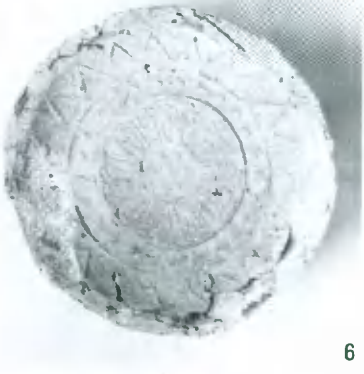
調 査 区 全 景

1. 全　景（北西から）

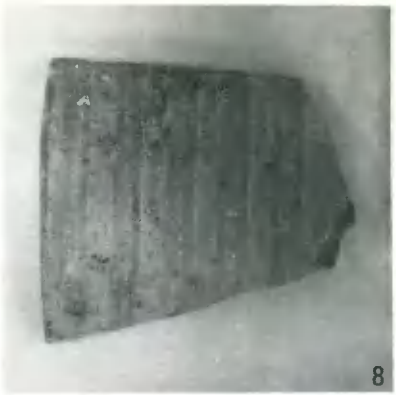
2. 全　景（北東から）

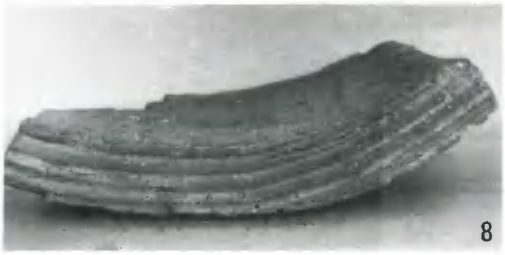
図版 8

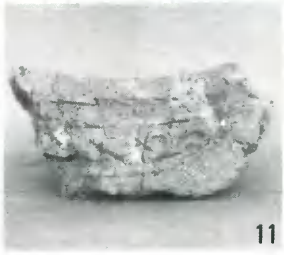
遺　　物



軒丸瓦　1類（1・2），3類（3・4・5），4類(6)



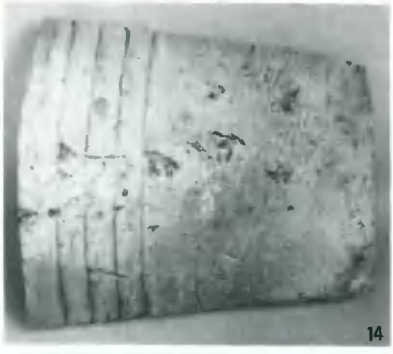




軒平瓦　1類(7)，2類(8)，4類(9)，5類(10)，6類(11)，7類（12，13）

図版10

遺　　物



軒平瓦１類(14)，丸瓦(15)，鴟尾（16，17）

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告（33）

大海廃寺緊急発掘調査報告書Ⅱ

発　行　岡山県教育委員会
岡山市内山下２－４－６

1979年3月20日　印刷
1979年3月31日　発行